シニア流で里川・長良川の夏を楽しむ(29.9)

船本 浩路

闘い終えて、ベースキャンプの道の駅「やまと」に戻ったのは、日暮れ直前であった。今日の汗を流すために早速併設の温泉に入ったが、昨日と違ってごった返していた。聞くところでは、今日は、郡上八幡の町で盆踊りがあり、その前にひと風呂浴びに来たお客が多かったのだろうとのことであった。

申し遅れたが、私はここをベースキャンプ（車中泊）にアユ釣りをしているのである。フィールドは天下の名河川、岐阜の長良川である。私はアユ釣りもさることながら、各地方の風土・歴史文化にも興味があり、両方の目的を達成したいという欲張りな思いを持って遠方まで釣りに出かけている。昨年夏、JR全線制覇のために美濃地方の未乗車区間の乗車とアユ釣りを兼ねてここまでやって来たのだ。

今年もまたアユの季節がやって来た。ベースキャンプは昨年の「やまと」。今年は、釣りも気合を入れるが、昨年から気になっている日本三大盆踊りと言われている郡上地方の盆踊りを拝見しようと考えていた。下調べで、アユ釣りフィールドには二つの有名な盆踊りがあることを知った。一つは郡上八幡、今一つは八幡から少し上流にある白鳥(しろとり)。まずは盆踊りのお話からさせていただこう。

＜盆踊り＞

盆踊りにはお盆の時期に戻ってきた先祖の霊を慰めるという意味がある。もとは念仏を唱えながら踊る念仏踊りと盂蘭盆会(うらぼんえ)（お盆）が結びつき、先祖や亡くなった方を供養するための踊りとして定着していった。また盆踊りは、8 月 15 日の晩から踊り始め 16 日が明けるまで踊り続ける。16 日が盆明けということから、賑やかに踊り歌って先祖を送り出すという意味もあったようだ。

盆踊りの起源は、平安時代中期の僧・空也にあると言われている。浄土教の根本である念仏を広める方法を模索していた空也は太鼓やかねなどを打ち鳴らしながら念仏を唱えることで人々に身近に念仏を知ってもらう工夫をした。また、その際に念仏に合わせて踊りを踊るようになり、これが念仏踊りとして世の中に広く知られるようになっていったらしい。さらに、この念仏踊りは、先祖を迎い入れ供養する盂蘭盆会（お盆）と結びつき、「盆踊り」となったと言われている。

鎌倉時代になると、僧の一遍上人が全国へと盆踊りを広めたが、この頃には仏教行事の意味合いよりも、民族芸能として重点が置かれ娯楽的な要素を色濃くしていった。そして江戸時代に入ると、盆踊りは地域の人々の交流の場や男女の出会いの場になっていく。

なお、今でもお盆に念仏踊りがされているところがある。踊っていると亡くなった人が上から降りて来る。そして、その人と一緒に踊るのだそうだ。亡くなった人と踊り人が一つになるのが念仏踊りなのだろうか。夏は亡くなった人との繋がりをたどる季節だがこれもその一つなのだろう。

盆踊りは日本各地で独自の進化を遂げ、発展していったが、徳島県の阿波踊り、秋田県の西馬音内（にしもない）盆踊り、岐阜県の群上八幡盆踊りが日本三大盆踊りと呼ばれているらしい。（活用資料：日本文化研究ブログ）

郡上八幡・旧庁舎記念館前

白鳥・下本町

清流・吉田川

＜郡上地方の盆踊り＞

アユとの闘いの後、ひと風呂浴びて郡上八幡の町に出かけた。町は水路が縦横にはしる古い町並みが残された風情のある城下町。観光客が多いのも頷ける。夜は町内いたるところに提灯が灯され、町中を流れる清流吉田川（長良川の支流）の岸辺や、その背景に見える郡上八幡城もライトアップされて町全体が幻想的な雰囲気に包まれている。午後 7 時半を過ぎるとカラコロ、カラコロと下駄の音が響き渡り浴衣姿の老若男女の姿が見え始めた。踊り会場は町内を日替わりで変えていくらしい。今日の会場は旧庁舎記念館前だ。午後 8 時に始まると、瞬く間に踊り屋台の周りに幾重もの踊りの輪ができていた。こんなにたくさんどこから湧いてきたのか不思議だ。地元の方なのか、観光客もいそうな感じだ。聞けば地元の人も観光客もひとつ輪になって踊るらしい。ここに郡上おどりは「見る踊り」ではなく「踊る踊り」といわれる理由があるとのこと。そしてコース料理のように 10 種類の踊りを順に踊っていく。夏場に幾日も踊るなかでクライマックスの徹夜踊りは、8 月 13、14、15、16 日の 4 日間もあるとのこと。

日改めて、今度は郡上八幡から少し北にある白鳥の町へ。郡上とは違って、小さな町で、駅前は人通りがほとんどない。真っ暗な駅下がりを歩き、しばらくして下本町に踊り屋台を見つけた。こちらは町通り

に置かれた踊り屋台を中心に、こじんまりした踊りの輪ができた。高校生らしき若い娘さんと小中学生の子たちが多くまさに町内の盆踊りの感じがした。踊りの輪のそばに、たくさんのトロフィーが置いてあった。どうやら今日は踊り名人大会らしい。番号のついたゼッケンをつけて真剣に踊っていた。白鳥踊りはアップテンポのものが多く若者が踊りやすいように感じた。幼子を抱いて踊っている若いお母さんの姿もあった。今から子どもに刷り込ませようとしているお母さんの強い思いが伝わってくるようだ。若いお嬢さんたちだけでなく、おじさんや子どもの踊り姿も格好良かったし、たくさんの浴衣姿を見て古き時代にタイムスリップした感じでほのぼのした気持ちになった。次回はぜひ徹夜踊りを見たいものである。

＜長良川と長良川鉄道＞

長良川は岐阜県北部の白山連峰の大日岳に源を発し、南へと岐阜県内を縦断し、伊勢湾まで全長166kmを流れる。その名は河口堰や鵜飼で知る人は多い。東京に向かって名神高速を走ると、名古屋地方に入り最初に遭遇する大河が揖斐川、次に長良川、そして木曽川である。この三つの川を合わせて木曽三川と呼んでいる。この三川の最下流域はとてつもなく川幅が広く、まるで日本の長江だ。私には中流域でも手に負えない大きさで、郡上八幡から上流がようやく手に届く川となる（右図・写真）。ちなみに、長良川のアユはかつて大きな反対運動が起こった河口堰を何とか通過して遥か130kmも上流の白鳥まで遡上するのである。この 10 cmにも満たない小さなアユ君は何故、川を上流へ上流へと目指すのだろうか。人間が過去に持っていた新天地を求めるごとくフロンティア精神のようなものがあるのだろうか。

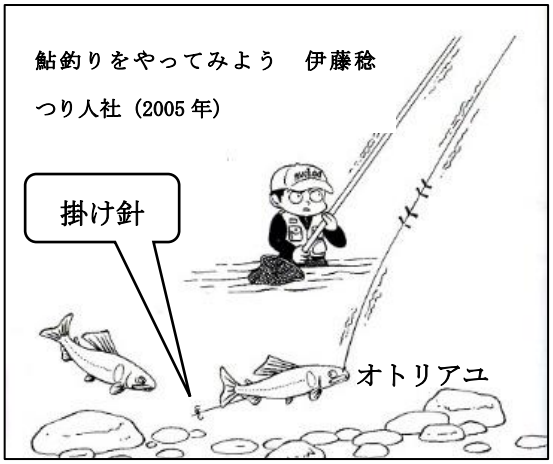
長良川・下流

私の釣りフィールドの郡上八幡から白鳥までは雄大な長良川の流れとその周囲に広がるのどかな山里の景色が見られる。そしてこの川に寄り添うように走る長良川鉄道のローカル列車がこの景色に溶け込んでいる。この鉄道は「ゆらり眺めて清流列車。車窓から清流長良川の自然の魅力をご覧ください」をキャッチフレーズにしているらしい。鉄道ファンが多いのが頷ける。よくテレビ番組にも取り上げられている。面白い駅もある。みなみ子宝温泉駅と言って駅舎が温泉になっている。この鉄道を利用すると入浴料金が安くなる。また、湯船に浸かっていても上り下りの列車の発着を教えてくれる時刻表の掲示板がある。そのほか、上品な観光列車「ながら」や清流列車にアユ懐石料理やお箏の弾き語りコンサートを入れるなど沿線の地域資源をうまく活用した企画を出している。車窓からのこの景色を皆さんにも是非見てもらいたいものだ。

長良川鉄道

＜闘いのこと＞

ここでアユ釣りのことを少し説明しよう。釣りと言えば、皆さんはエサ釣りを想像されるだろうがアユは一般的には友釣りでありエサ釣りではない。自分のなわばりに侵入したアユに体当たりして追い払おうとする習性を利用した日本独特の釣法である。竿先から出した糸をオトリアユの鼻に付けた鼻環（はなかん）に通して、その糸をさらに尻尾近くまで持っていき、そこに掛け針をつないでアユがいそうな場所に誘導すると、なわばりを侵されたとしてオトリアユに攻撃してくる。この時に掛け針に引っかかるのである。(右図参考)



「闘い」と言ったのは、アユ釣りは難しい釣りなので、気合を入れてやらないと釣れないからである。目に見えないほど繊細な仕掛けを使い、オトリをうまく泳がせるためにアユと糸の動きに神経を集中し、流れのある川に浸かって一日中立ちっぱなしで竿（長さ約 9m）を持ち続けなければならない。また、大小のよくすべる石が転がっている河原を歩き回ることなど、技術と忍耐と体力が求められる。我々シニアにはちょっと過酷な釣りであるが、体力の衰えを受け入れながら、年齢に応じたスタイルでやっている。しんどくても夢中になれる不思議な魅力があるので一日があっという間に過ぎてしまう。

＜ここはシニアの天下だ＞

アユ釣り師の朝は早い。空が薄っすら明るくなると周りの車からゴソゴソ動き出す音がしてくる。「お早うございます」と初対面の方からも挨拶をいただく。皆、目的は同じなので、仲間のように思えてくるのだろうか。今日も、どの顔もさわやかで充実しているように見える。道の駅「やまと」は多くのアユ釣り師がベースキャンプにしている。第一線を退かれたシニアの方が多い。毎日が休日なのか長期滞在組が多い。ここに来れば、宿に泊まるという概念が消えてしまう。お風呂、食事、トイレ等すべて道の駅で完結する。余分な時間が除かれ効率的に時間が使える。資金の節約ができる。いろんな人と交流ができる。デメリットは何もない。また、次の日に使うオトリアユを生かしておく専用水路が用意されていることも有難い。釣れたものは漁協に販売することもできるし、アユ一匹を併設の温泉に持って行けば入浴料金（700 円）が無料となる。ちなみにこの温泉は泉質がよく天下の下呂温泉に次いで岐阜県で NO2 の人気だとか。最近は釣り師だけでなく、観光目的の車中泊も多くなった。アユ釣りの好シーズンともなれば、釣り師の車で満杯状態となる。地元岐阜、名古屋はもちろん、関西、関東の他府県ナンバーがずらりと並ぶ。車種はいろいろだが、足を延ばして寝ることができるスペースのあるワンボックスカーが多い。皆さん車内は居住や道具の収納スペースなど使い勝手が良いように改装されている。小さいながらも動くホテルである。中には豪華なキャンピングカーもある。食事は、私はコンビニと外食だが、自炊されている方も多い。夕食後は自然発生的に

ベースキャンプ・道の駅やまと

テーブルを囲んで全国河川のアユ談議に花が咲く。とにかく、ここでお会いするシニアはイキイキされている。人生、終着前の最後のアクティビティな行動かも知れない。と言うのもシニアに残されている体力のある時間はそんなに多くないからだ。それは今年の釣りでも私と同行の先輩は実感している。

＜アユの味から川を評価する＞

アユ釣りの楽しみは釣り味もさることながら、美味なアユを食べられることにもある。皆さんはアユの塩焼きを食したことがおありだろうか。実にうまいのである。これにヒントを得てか、利き酒会ではなく「清流めぐり利きアユ会」なるものが毎年高知市で開催されている。主催は高知県友釣連盟。高知も岐阜と並んでアユ釣り王国だ。河川環境を良くしようと県内の多くの熱い釣り人に、全国の釣り人が協力して実施されているが今年で 20 回目の開催という。

アユは、河川環境の影響を受けやすく川により味が異なる。全国の河川のアユを食べ比べて、川の環境を改めて考えようというイベントだ。様々なアユ料理と地酒が味わえるらしい。昨年は北海道朱太川から九州三隈川まで全国 56 河川が参加した。郡上八幡市を流れる和良川（飛騨川水系）は過去にグランプリを 3 回獲得したことで、一気に値打ちが上がったのか、郡上八幡の川魚料理屋では「和良アユ」の塩焼きは一匹 1,800 円にもなっていた。長良川のアユも過去にグランプリを取っており、1,200 円であった。

長良川、和良川の他に、アユの美味い川を求めて、評判の高い匹見川（島根県高津川水系）や安田川（高知県）にも行った。何れもダムの無い川で、水質はもとより周囲の自然環境も抜群である。

私にはダムがある川で釣ったアユで嫌な思い出がある。ダム下流のアユはカビ臭くなるのだ。かつて京阪神の水道水がカビ臭くて飲めないと社会問題になったことがある。この原因は原水（琵琶湖水）中に含まれていた微細藻類（ラン藻類）のアナベナやオッシラトリアが出すジオスミンや 2-メチルイソボルネオールというカビ臭物質であった。琵琶湖の富栄養化が原因で大量増殖したのである。ダム下流のアユにこの時とまったく同じ臭いがすることを経験している。この藍藻類は琵琶湖のような止水域でよく繁殖する。ダム湖にこのような生物が繁殖した場合にダム下流にはその影響が出ることは十分考えられる。

＜長良川のアユは世界農業遺産＞

長良川沿いの主要道路には世界農業遺産認定「清流長良川の鮎」（右写真）と書かれたのぼりが至る所に立ててあった。世界遺産はよく耳にするが世界農業遺産とは聞き慣れない。

郡上市の HP には『イタリア・ローマに本部を持つ「国際連合食糧農業機関」が 2002 年に開始した仕組みで、次世代に受け継がれるべき重要な伝統的農林業･水産業や生物多様性､伝統知識、農村文化、農業景観などを全体として認定し、その保全と持続的な活用を図るもの。長良川は流域の人々のくらしの中で清流が保たれ、その清流でアユが育ち、清流とアユは、地域の経済や歴史文化と深く結び付いている。長良川におけるその循環は、人の生活、水環境、漁業資源が相互に関連している世界に誇るべき「里川」のシステムといえ、この「里川」のシステムが世界に認められ、27 年 12 月 15 日、世界農業遺産に認定された』と記されていた。

里山という言葉は広く知られている。そして里海もよく使われるようになってきた。一方、ここは「里川」だ。川でのアユは河床に付着するコケ（付着藻類）を主食とするベジタリアンである。コケと言って

もピンと来ないかも知れない。馴染みのあるもので言えば、おにぎりに巻くノリ（海苔）のようなものだ。このコケの質と量によって成長、生息数が左右される。コケは野菜と同じように太陽の光と栄養塩類（チッソ、リン、カリ等）が必要である。川の最上流の水は栄養塩類に乏しく低水温であることからコケの生育にはあまり適さない。一方、人里近くになると人の営みから生じた適度な栄養塩類が川に入り、コケの生育に適した水質となり、アユの生育にとってはまさに好都合な場所となる。過度な栄養塩は水質を悪化させるので、そうさせないように現状は使いながら守る水循環ができているのだと思う。人とアユ、お互いにうまく共生することで大きな恵みを里域に与える魚である。ちなみに、人里離れた最上流のアマゴやイワナは周囲の樹木から川に落下した葉っぱをエサに育つ水生昆虫を主なエサとしている。

長良川・大和付近

＜地方を思う＞

自然に乏しい都市部に住んでいる私は、地方にある豊かな自然を見たい気持ちが周期的に現れる。その手段として釣りがある。私は欲張りなので、森川海とすべての自然に会いたくなる。それで、釣りは山中の渓流、里域のアユ、海では波止、磯、船と幅広くやって来た。そして近辺に限らず随分と遠方までも一流の自然と大釣果を求めて通った。

長良川はそうでもないが、地方に出かけると年々元気がなくなっているというか、人影が少なくなってきているように思う。空き家もずいぶん目立ってきた。特に、川釣りに行くとそう思う。人が減るのは若者の仕事場がないからだというのが一番の理由のようだ。若者が減ると町が一気に元気がなくなるらしい。その打開策なのか、最近、地方創生とか活性化とか、町おこしとかいう言葉をよく耳にする。世界農業遺産や清流利きアユ会もその一つだ。釣りに限らず、町おこし、地方創生の名目で、地方はいろんな試みをされていると感じる。アユ釣りを通して知ったものは高知安田川馬路村のユズ加工品、山陰高津川は国土交通省の一級河川水質ランキング日本一を謳って、アユをはじめ清流の恵みを売り出している。地方の地域資源はやっぱり、素晴らしい自然環境とそこからの恵みである。このような取組みがうまく軌道に乗り、観光客がお金を落としてくれるなどして経済が少しでも活性化すれば若者が生まれた町でも定着して生活できるような町づくりの第一歩となる。ふるさと納税は少し過熱気味になって批判もあるところだが、制度としてはこれからも是非充実させてほしいと思う。一生懸命高校まで地元で育てて、

後は東京に行ってしまっては、虚しさを感じる親は少なくないだろう。また、人口ではなく、面積で見ると地方が圧倒的に広い。その土地を守っていただいていると言う考えもあっていいと思う。

＜思いは全国の川へ＞

川は雨を海にまで運ぶために日本列島の隅々までに血管のごとく張りめぐらされている。そしてアユは一部の劣化した都市部の河川を除いて、この張り巡らされている川にごくごく普通に生息し、人里近くには特に多い。しかし、他の魚と違うところがある。それは、食って良く、釣り味も良いということである。そのため、漁業・遊漁の対象として特に大切にされてきた。アユの多く棲む川には漁業組合がある。組合は増殖・資源保護を担い、その代償としてアユ漁と遊漁による釣り人から入川料という収入がある。遊漁システムは全国のどこの川に行こうがほぼ同じで、勝手知らない遠方に釣行しても戸惑うことなくすぐに釣りができるのである。

アユに関わることは、単に釣りの醍醐味を味わいその生態を知る喜びだけではなく、アユと密接な関係を持った地域の暮らし・歴史・食・文化を含めた風土に触れることになる。それは私にとって大きな魅力となり、より一層私を全国の川へ誘惑するのである。

前述したように最近は高速道路が整備され、道の駅も充実している。温泉併設の駅も多い。車中泊できる車があれば宿を確保する煩わしさも無く、気の向くまま、思うままに出かけることができる。それぞれの川にジグソーパズルのピースのように張り付いている流域にはその地域に根差したまだ知らぬたくさんの人の暮らしがあるように感じる。今までに 18 きっぷ（普通列車）を利用して各地に出かけたが、この川を巡る旅はそれとは一味違った面白みがある。

友釣りは日本の伝統的な釣り文化の一つでもある。ダムなどを含めて河川環境の悪化でアユの数が減ったこと、仕掛け作りに手間がかかること、釣りそのものが難しく慣れるのに時間がかかることなどが今の時代に敬遠されるのか、アユ釣り人口が減ってきている。特に若い釣り人が少なくなった。

そんな中で、アユ釣りの聖地、郡上はまだまだ健在だ。釣り人の数は他の川に比べて一桁違うのではないかと思うほど多い。盆踊りもまた郡上八幡や白鳥ではたくさんの老若男女の踊り人を見た。この町は盆踊りもアユ釣りも流域の価値ある財産としてみんなが大切にして大いに楽しんでおられるようだ。

長良川のアユは娘の友や職場の友、
そして家族にと食していただいた